

【目的】 乳癌の治療方針はホルモン受容体 (ER、PgR)、HER2 などにより決定されるが、治療抵抗性で予後不良な高悪性度症例が存在する。これらの治療抵抗性、予後不良要因の分子機序解明はさらなる治療効果改善においては不可欠である。本研究では、がん幹細胞性と腫瘍免疫、がん免疫チェックポイント機構に注目し、治療効果との関連を解明することを目的とした。

【方法】 1. トリプルネガティブ乳癌 (TNBC) : 術前化学療法施行 48 例を対象とし、がん幹細胞マーカーCD44v9 や BRCA1、vimentin などの発現を解析し、治療効果、予後との関連を解析した。2. HER2 陽性乳癌 : 術前化学療法施行 75 例を対象とし、腫瘍浸潤リンパ球 (TIL)、PDL1 発現を解析し、治療効果、予後との関連を解析した。

【結果】 1. TNBC における検討 : 非著効例において、CD44v9 高発現症例では有意に予後不良であった。術後追加治療の適応を検討する上で治療前 CD44v9 発現が有用である可能性が示唆された。2. HER2 陽性乳癌における検討 : TIL と奏効率には正の相関を認めたが、高 TIL でも PD-L1 陽性例では奏効率が低く、PDL1 が治療抵抗性の一因となる可能性が示唆された。

トリプルネガティブ乳癌 (TNBC) における治療前 CD44v9 発現と予後

